

○ 鉛筆について

10H	左の数字は鉛筆の硬度（濃さ、及び芯の硬さを表した数字）表記、及び表現できる濃淡についてはメーカー、また生産国によって多少異なります。
9H	日本では基本的に6Bから9Hまでが主流。
8H	HはHard、BはBlack、FはHとBの中間。Firm/Fine（しっかりした／細い）の意。
7H	芯は黒鉛とねん土を熱して固め、つくられます。また、硬度の差は混ぜられる黒鉛とねん土の量によって生まれます（黒鉛が多くねん土が少ないほど濃く、柔らかくなる）。
6H	黒鉛は炭（石炭）の結晶であり、金属物質ではありません。
5H	鉛筆の芯は石炭の粒、粉状を固めたものなので、画用紙といったザラザラした質感の用紙には描きやすい画材です。反面、ケント紙と言ったツルツルした質感、表面には定着しにくい特徴があります。
4H	
3H	鉛筆の削り方について。
2H	鉛筆描画、特にデッサンでは下図の様に芯を長めに出して削るのが一般的です。
H	こうする事で、細かな点から、幅広の線まで、1本の鉛筆で多様な描画表現を行う事ができますが、一方、折れやすくなるので、持ち方や筆圧等に気をつけながら使用します。
F	また、先を尖らせるには、カッターで削る以外にも、紙や紙やすりを使って尖らせていく方法（特にH～などの硬度の高いもの）があります。
HB	鉛筆の持ち方について
B	基本的には学習の時と同じです。その上で、大きな画面に長い線を描く様な場合は、鉛筆を軽く持ちながら手首のスナップを効かせて描くなど、表現に合わせて多様な持ちかたが求められます。
2B	
3B	完成後
4B	鉛筆描画面を上から擦ると描画が消えたり薄くなったりします。それを防ぐため、描画完成後には、鉛筆描画をコーティングし、画面に定着させる定着液（フィキサチーフまたはフィクサチーフ、スプレータイプが主流）を用いる場合があります。但、定着液使用後の修正加筆は困難になります。
5B	
6B	
7B	
8B	
9B	
10B	

削り方の例

カッターで無理に尖らせようとせず、場合によっては荒削りの後、紙に描いたりしながら形を整えます。
また、硬めの芯の先端を長方形状にする事で、より細く、シャープな線を描く場合もあります。



○ 使用する紙について

一口に紙と言っても、ザラザラしたものからツルツルしたものまで様々な種類があります。鉛筆の項でも述べましたが、使用する画材や表現に合わせて紙質（紙肌、紙表面の凹凸）を選ぶ事で、画材の特徴や持ち味を、より効果的に活用する事が可能です。例として、絵の具で淡彩表現を行う水彩画の場合、その専用紙（水彩紙）は水分への耐性が高く、かつ滲みが効果的に広がる様に、凹凸が大きいザラザラした紙質です。一方、ペンでマンガを描いたり、図面を引いたりする場合には、ケント紙といった、凹凸が少ないツルツルした紙を用いる事で、鋭角でシャープな直線を引く事が可能です。

※ 紙に限らず、絵画を制作する上での基盤・ベース素材を“支持体”と呼びます



○ 消しゴムについて

鉛筆描画、特に鉛筆デッサンでは、描画箇所を消す道具として主に練り消し（練り消しゴム、または練りゴム）を活用します。先を尖らせて細かい箇所を消したり、上からバンバンはたく、絵の上を手のひらで伸ばす様に転がす等の使い方によって微妙な濃淡を表現します。尚、練りゴムは汚れたら指で練りこんで使用し、見た目かなり黒くなっても使用する事が可能です。また、学習で使う普通の四角い消しゴムも、画面上の汚れを消したり、ぼやけた輪郭線をシャープに整える等で活用します。また、木炭デッサンにおいては、食パンを使用する事もあります。



○ 身体の姿勢や画面の向きについて

静物鉛筆デッサンにおいて、対象物の立体視や空間認識を行う際は、自身の目線の高さ、また、目からモチーフまでの距離や位置関係が基準となります。無理に姿勢を正して描く必要はありませんが、モチーフを観察する際、時間経過によって大きく視点の高さ、自分の目の位置が変わることが無い様に意識しましょう。その上で、画面内での構成が大凡決まり、一定の方向に合わせた線画や、細かな質感表現を行う段になったら、今度は画面の向きを変えて（画面をグルッと廻してみたり）描いたり、また、描画中は時折席を立ち、少し離れた位置から描画面を見てみると、全体像を自然な視点で確認することができ、大変効果的です。

